

幻影からの脱却

かつて横浜に文化はなかった

特集
2

白土秀次

<神奈川県新聞文化部長>

1———市民不在の開港文化

日本の伝統主義について、亀井勝一郎氏は次のように述べている。「私は明治の開国から今日までの日本を、民族変貌期の序曲時代と名づけたことがある。改めて言うまでもないことだが、開国によって異質の文化に接触し、長いあいだ蓄積されてきた固有の文化とのあいだに様々の摩擦を生じ、その混乱を通して、民族として全面的な変化を迫られつつある時代という意味である。

開国は、また独立国家としての自己形成を急速に迫られたが、明治維新、西南の役、日清戦争、日露戦争、第一次大戦、満州事変から第二次大戦と、ほとんど10年あるいは20年おきに内乱と、内乱の危機と戦争の、連続の経験であった。明治元年からかぞえて、敗戦の昭和20年まで、わずか80年間にこれだけの民族的危機に直面しなければならなかったわけで、安定期間は極めて短い。

外来文化の流入の仕方が、かなり突発性を帯び、そこに秩序も順序もなかったことは周知のとおりだが、それへの反発あるいは抵抗もまた機械性を帯び、わずかの安定期間と戦争期間を通じて、これでも、動反動のかたちで存在し、精神がバランスをとることの容易でなかったひとつ原因は、こうした情勢にもあったと言えるだろう。つまり変貌のスピードは異常であり、一種の熱病にかかっているような状態の連続であったといっているのではなかろうか。安定期間における欧化熱と戦争期間における国粹熱と、それによって交互に翻弄されてきたようなものだ。一世紀にもみないこの年代の日本人の経験は、ある特殊な病気の経験に似ているといってもよさそうである。島国人固有の外来文化への旺盛な好奇心からくる智慧熱にも似ているし、同時に内的にはげしい分裂症状を呈してきたことも事実である。

私はいわゆる伝統主義を、こうした状態のなかで

の、危機意識のあらわれとして考えてみたい。外来文化の急速な流入と享受によって生ずる自己喪失の不安と、内部分裂の危機の自覚が根底になっているということだ。たとえば、自国についての自己評価の不安定さと空想性に、それが端的にあらわれている。独立国家としての自己形成を迫られたといったが、そのときの「自己」とは何か。ややもすれば見失いそうな自己の実態への性急な探求と、性急な断定が行なわれてきたが、これは開国当時から今日までの一貫した傾向ではなかったろうか。——〈近代日本思想史講座「民族変貌期における伝統の意味」〉

この論説は、外来思想に対して、日本人がつねに「近代ヨーロッパへのぬき難い劣等感と、それと表裏した優越感といったかたちで、交互にあらわれてきている」伝統を指摘しているが、この場合、伝統ということばを文化ということばにおきかえても十分に理解されるものがある。

そしてまた文化というものの形成が、いかに尋常一様に容易でないものであるかも感得される。文化が、ことに開国当初の文明開化が、横浜に上陸して以来、横浜市民にたやすく順応し、消化され、結実されたごとき解説書がすくなくないが、私はこれに強い不満をもち続けてきている。文化ということばが、この場合、文明開化、あるいは舶来文化と呼ばれるならまだしものこと、当時は生活的片鱗すらうかがい知れなかった異質の輸入のものに対して、あまりに独断的な結論づけをしているからである。

文化とは、単なる西洋知識や機械や物象の移入をいうのではなく、それらのものが市民の生活の中におかれて、どのように判断され、利用され、テストされて具象化されていったかを末端まで見届けることによって採点されるものであろう。

私は、その意味で、はなはだ奇矯な言い方ではあるが、かつての横浜には文化はなかったと思う。

横浜文化として、開花されることがなかったと思う。

開港、明治維新、それ以後、とうとうして流れこんだ舶来文化を、横浜文化とみる人もいるが、これはまた飾り窓に並べられた「文明開化」の質草に過ぎない。

それらの機会に訪れた機械文明や思想や様式は、しばらく横浜で戸まどい、あふれ、道化じみながら、やがて衰亡し、あるいは姿を消し、東京へ移って行ってしまったものが多い。横浜は東京の関門に過ぎなかった。そしてそのあとには、行きがかり上、いつとはなしに残り香となってつくりあげられた植民地的ムード、無気力なエキゾチックさが横浜の体臭となった。

この体臭をすら「横浜文化」などといって随喜の涙を流しているものもいる。

横浜になぜ文化が根をおろし、開花しなかったか、その大きな理由は、横浜開港が政治的なつごうで便宜的に行なわれたものであったこと、政治、経済の中心は終始東京にあって、しかもその東京に横浜があまりにも近接していたこと、市民は他国からのよせ集めにすぎなかったこと、極貧のものが多かったこと、などによる。伝統のない風土に文化は咲くはずもなかった。そしてこの横浜の地理的、政治的、経済的なハンディキャップはその後、時代が大正、昭和と移っても基本的には変ることなく持続されてきた。

いったい、文化とは何か。常識的な定義では「人間の生活のしかたのうち、学習によってその社会から習得した行動様式全体」をさすものであり、もっと直截的に言えば、「生活を楽しく、豊かにする市民運動」であって、単なる市民の教養とか文芸などは対象とされない。

開港と同時に横浜に上陸してきた舶来文化は、生活様式の貧寒であった市民を驚かせた。ガス灯や写真やせっけんや鉄道、電信、電話、ホテル、夜

会服と各種の出現にキモを奪われながら、それに同化し、調和し、受け入れようとした。

しかし、それを本当に生活の道具として組み立てなおし、生活の広場として共有するまでには、多くの時間が必要であったし、結局は実を結び得なかった。百年後の今日でも、それは完全に市民の生活に安定したものとして直結されていない。

明治、大正、昭和とこの年代に出現した実業家や為政者にも、当時、文化を正しく理解し、推進する者がほとんどいなかった。

横浜に文化が育くまれなかったとするのは、そうした事態をさしてである。

2 横浜と東京

横浜の発展は開港以来複雑多岐な様相を続けてきた。しかしこれを市民生活の底辺で眺めるとき、暗澹たる時代が幾十年も続いたことを忘れることはできない。そしてまた、この貧しい市民生活の故にこそ、文化は結実しなかったともいえる。

たとえば、開港と同時に最っ先に上陸してきた新知識はキリスト教の布教であった。アメリカ、イギリスその他のプロテスタンティズムの諸教会に属する宣教師たちが、20に近い教会を市内に建て、布教のかたわら聖書や辞典などを和訳して刊行した。また海外新聞の邦訳新聞発行が刺激となって、これが日本人による日刊紙発行のきっかけともなった。

ヘボンやシモンズによる病院、種痘所、孤児収容所など福祉施設の設置、外人技師の指導で水道やガス、鉄橋などがつくられ、クラブや劇場や夜会、音楽などもさかんになった。

しかしこれらは短いもので1、2年、他のものは数年にして東京へ移り、東京で発達した。

クリーニングとかマッチ、理髪業、西洋料理店、ビール製造、ボートハウス、貸自転車、洋書輸

入、義足、共同便所、競馬などもそうであり、政府が殖産興業政策の一環としてわが国が最初にはじめられた共進会も翌年は他の都市に開催されている。

舶来文化が横浜市民の頭の上を素通りして東京へ行ってしまったのは、横浜にそれをうけとめるだけの土壌がなかったことであり、その土壌の不毛さは市民の生活能力の低さによるものであった。土壌は政治的、経済的タイミングでもあれば、資質としての市民の経済力それ自身といってもよかった。東京の文化的密度の高さが、吸引力の強さを示したことも事実だが、おしなべて市民生活の貧困と新興都市のため愛市精神の欠如などが生活環境の浄化、文化の向上といったことに素直に結びつかなかった。

とくに意外に感じられるのは、当時、教育の普及と学制の改革に熱心であった政府の方針に沿って横浜でも小学校、中学校の設立がさかんであったが、この教育の成果はそれほどあがらなかったことである。また、外国語の知識を広めようとして、ヘボンやブラウンなど多数のアメリカ宣教師や社会事業家が英学校に英語塾などを開設して普及につとめたが、これも大部分は数年をまたずして廃校になったり、東京へ移って行ってしまった。宣教師たちに対する市民の協力の消極さが彼らを失望させた。

横浜発展史をひもとくと、文明開化の到来に次いで殖産興業のはなばなしい足跡が記され、とくに生糸貿易や海運業の発展は近代産業のチャンピオンとして関東大震災まで続いた。そしてそれらの先覚者、あるいは創始者として原富太郎、茂木惣兵衛、浅野総一郎、小野光景、高島嘉右衛門をはじめ多数の成功者の名前があげられる。

彼らの頭勢や政治的履歴、成金趣味が誇らしげに記録されている。

しかし彼らのうち果して幾人が横浜の文化の発展

に尽した者があつたらうか。横浜市民を心から愛し、横浜を郷土として文化的風土に浴さしめるため、どれだけの努力を払ったか、というと、残念ながらこれといって特筆すべき人材はいない。彼らは結局は成り上がり者でしかなかったし、文化を理解することはできなかった。そこに、市や国や事業や政治はあつたが、それらのすべてを胚胎し、新しい歴史を形成するもうひとつの高い次元の生活——文化の把握に気づくことができなかつた。

その意味では横浜市民全体が、文化とは創造するものであつて、簡単に懐手のままで手にすることのできるものではないということに気がつかなかつた。

舶来文化は、毛唐の手品のように奇妙きてれつなものであつたが、それをどう生活の中に融合し、分解するのもわからず、また、当時の事業家や為政者は、教育者もふくめて、その実践を忘れていた。

その間に、東京へ流入した文明開化の落し子たちは、東京で粉飾され、解体され、発育の場所を選択していった。

郵便や鉄道は、東京と横浜の発展の比較に大きな差をつけたし、やがてそれは東京に横浜が追隨するのは止むを得ないことだとするあきらめを横浜市民に植えつけていった。

横浜の文化を論ずるひとは、よく汽車や人力車が登場したのは横浜が日本で最初であつたとか、谷戸坂上にはじめて外人のクラブ・ゲーテ座が誕生したとか、氷水やビールの発祥地にあることを誇りとし、原富太郎が岡倉天心、横山大観、菱田春草、下村観山らの大パトロンとして物心両面から援助を与え、やがてこれが機縁となつてハマ展がつくられ、中央画壇へ進出の足場をつくつたことを吹聴する。

しかし、これらはたしかに一種の文化的遺産であ

り、なにがしかの文化的な事業ではあつても、文化の根幹ではなかつた。極端なことを言えば、金持ちの余技道楽ですらあつた。そしてまた、市民は市民で、市民生活の周辺からは何を希求し、建設されねばならぬかを探り出す意欲すらもちあわせていなかった。

三溪園は原が努力して蒐集した文化的遺産の逸品ではあるが、これを横浜の文化、横浜市民の文化とはいえないように、開港以来、横浜市民が自分の手で形成し、純化し、発展させてきた文化はない。

強いて、これを探せば、横浜水道事業や開港以前の寛文7年<1667>中区伊勢佐木川一帯を埋めた吉田勘兵衛<吉田新田>、続いて小高市右衛門<1687>、新井忠兵衛<1770>、尾張屋太仲<1760>、藤江茂右衛門<1760>、岡野良親<1833>、平沼九兵衛<1839>、太田源左衛門<1850>、永島段右衛門<1852>らの事業をあげるにとどめるほかはないだろう。

しかしこの水道事業や町づくりの整備計画も、当時苦難の多かつた条件に比べて近代科学の粋をあつめ得る現在において、どれだけの進展をみてきたかといへば、現代人のわれわれの無力さを歎かすにはいられない。

横浜の都市発展は、今世紀において二度の蹉跌を喫した。第一回は関東大震災、第二回は第二次大戦の敗北であつた。

この二回にわたる潰滅的打撃によって横浜のこうむつた経済的損失ははかり知れないものがあつたが、一方、近代的都市形成の再開発には、またとない機会をもつたものであつた。しかし、この二回とも横浜市と市民はその好機を自ら見送り、あまつさえ、都市としての特性を自らの手でうちこわした。

港湾都市としての性能を脆弱化し、京浜工業地帯を交通地獄によって孤島化せしめたことである。

かくして、横浜は無自覚な父祖に続いて、ぐうたらな二代目が、ただいたずらにのれんの古さだけに愚痴をこぼし、東京にのれんを奪われ、捨て扶持で余生を送る裏店の中風おやじと化してしまったのである。

3——都市と文化

しかしこのことは徒らに悲憤慷慨しても始まらない。大震災や第二次大戦の空襲で、横浜の文化的遺品などが相当焼失してしまったことを嘆く人がいるが、これはいまさらどうともしようがないし、その感傷は好事家たちにまかせておけばよいだろう。開港博物館の建設計画案などもよく話題にのぼるが、私はそれほど重要なものとは考えない。

失われたものは再び戻ってはこない。それよりも、新しい文化をつくる土壌を考えなければならない。

開港以来、横浜の古い人たちは、文化を、与えられるものと誤って認識してきた。開港当初は外国の商人や宣教師たちをその伝導役と考えたし、それ以後は政府や県、市当局が、市民のための「文化」的施策を建設してくれるものと思こんできた。

そうした誤解が、本来醸成されるべき文化の芽をつまむばかりでなく、その土壌をも踏みにじってしまったことに気づくべきである。

横浜に文化が育たなかった理由としては、このほかに横浜が長崎や京都や大阪、長野、新潟のように中央から遠く離れ、しかも封建時代からそのままにうけつながらきてきた市民でなかったこと、市民層も、市民の生存本能も他都市と隔絶されて、閉鎖的でなかったことをあげなければならない。こうした条件は、市民の聚落性を強め、そこに市民に共通する生活環境なり、生活条件なりを強

め、生活文化を追究する手段をつくっていたからである。その点で、開港当初の横浜を開放的というのは誤りであって、そこには市民による都市形成はまだ意識されていなかった。単に全国からの寄りあい人間でつくられた聚落であり、その日暮らしの市民の集合に過ぎなかった。この都市形態の出発と市民の無自覚なままの発展は、後年の横浜の性格をつくりあげる一因でもあった。まとまりのない、伝統のない市民生活の中に文化が芽生えるはずはなかった。

やがて東京が文化密度の濃い都市として膨張すると、自らの生活の中で満たされぬもの、求め難いものを東京に求め、東京に追従して横浜は今日を迎えた。

この自堕落な精神は終戦後さらに深まり、その代償として横浜は東京のベッド・タウンと化した。もちろん、この道程には国の政治の貧困や地方自治の財政の危機なども重要なモメントになっているけれども、新しい時代に、新しい都市と新しい文化の形成という冷厳な反省と洞察が用意されない限り、この醜態はさらに長く続けられてゆくことになる。ということは、さきに長崎や新潟をあげて都市文化の発生の理由を述べたけれども、これからの都市における文化とは、かならずしもそうした理由によらなくなっている一方、その是非がいずれにあるにせよ、東京と横浜の地続きは避けられない現象であり、そうした地域性の中から横浜の将来を考えるよりほかに方法はないからである。

要するに、横浜は横浜自身の興亡を、これから探し求めなければならぬし、その命運は横浜市民が直接に分担することになるわけである。飛鳥田横浜市長は、さきごろ「横浜の都市づくり」というマスター・プランを発表し、その中で、都市づくりの目標として工業都市、港湾都市、住宅都市の三本を支柱とする国際文化管理都市の構想を述べ

た。

この構想は、人口の稠密化、公害問題、交通問題などをいやでも抱えなければならぬ近代都市の宿命からみて、当然予見されるべき管理方式ではあるが、一方、多分に観念的であり、甘さも露呈している。その最もはなはだしい点は既成の市街地や港湾を含んでいることであって、これらの開発整備がいかに至難であるかは東京都の場合をみても計算済みのはずである。

新しい都市づくりは、欧州はもちろん、アメリカの場合ですら既成市街地と絶縁して、文字通りニュータウン建設を基本としなければならなくなっている。

副次的には、そのニュータウンに既成市街地から人口や施設や工業を間引きするよりほかに方法はない。

これは、都市づくりであると同時に新しい市民形成、市民文化の造成に帰結される。アイロニカルな表現をもってすれば、古い市民感情を否定して、新しい文化をそこに根づけしてゆこうとするものである。

横浜に文化らしい文化はなかったとして、かりにその無気力で、他人まかせで、愛市精神のない市民の表情を「古い横浜」の姿とすれば、それが巢くって、意固地な抵抗素となっている地域層を思いきって切り離す方策が当然考えられねばならぬ。同時に、この新しい都市づくりが、施策者のひとりよがりでないよう、市民の積極的な自主精神に依存することを条件とすべきである。

4——— 結び

冒頭に示した亀井勝一郎氏の指摘にもあるとおり「危機意識における自己評価の不安定さと空想性……自己の実態への探求……」は、現代社会の存立意識でなければならぬ。そしてこれが執拗に、

前向きに繰り返えされるとき、社会生活の前進がある。

過去において横浜文化の形跡を認めることができなかつたのは、そうした点で横浜市民が無為な、安逸な生活におぼれきっていたためである。

たとえば、航空機が発達しなかつた戦前までは、ともかくも横浜は外来文化の上陸地点であつたから、そうしたムードの中で横浜市民は最も先進的な市民であると錯覚しがちであつた。上陸地点であることと市民生活が文化的であることとは何の関係もないにも拘らず、そう思いこんでいた。外国映画をはじめ総ての輸入品は横浜税関の検査をうける建前であつたから、流行や映画封切りは横浜が一番早かつたが、これとて、それがそう行なわれていただけのことで、市民が直接ニューモードを探りあてていたわけではない。横浜から送り出された生糸、綿製品をはじめ雑貨類は東日本関係の製品の8、9割にも達していたが、この中に横浜の地場産業のものはほとんど含まれていなかった。往昔につくられた埠頭や鉄道や鉄の橋や倉庫群から何かしら建設的な、生産的な豊かさが感じられたろうけれども、これにも実質的には最早第一級のものではなかつた。

市民が活気のある都市、うるおいのある市民生活に圍繞されているような気分であるとき、東京をはじめその他の都市では、ようやく近代的な都市づくりに着手していた。

横浜市民は、開港以来日本で一番ハイカラな都市であるという幻影にただおぼれきって、市自身の経済発展や施策の増強にそれほどの努力を払わなかつた。雑多な寄り合い世帯による単なる消費都市以外に何の性格ももち合わせてはいなかつた。それは奢侈と頹廢と隠微のほかに、何ものも残さなかつた。

地方の都市が、遅れた文化の摂取にやっきとなり、経済的な独立と販路の拡張に懸命な努力を払

ったのは大変な違いであった。

要するに地道な地方人の努力——その必然性はあったにしても、それに対して上っつらな文化人気取りでやってきた横浜の性格が今日を迎えたということになる。

横浜が新時代に生れかわって発展してゆくためには、こうした認識と反省が必要であり、そうした脱皮が可能であると同様に、横浜の文化もこれから新しく創造されなければならない。なぜならば、都市は近代化されねばならぬし、新しい都市づくりは新しい文化を希求し、媒体としなければならないからだ。

そのためには、次の二つのことがあげられる。第1は、これからの都市づくりをどうやってゆくか、その設計をできるだけ早く策定することである。

この横浜の発展計画は、いままでの例をみてもわかるように、徒らに外部からの援助や他都市の発展の模倣を考へては達成できない。市の当事者と市民の協同作業で着手する以外にはない。

第2は、その策定された都市づくりの計画に、市民が全面的に協力し、達成のためにはある程度の犠牲を甘受することである。

甘受ということが、当局者の独断専横を是認するような危険があるならこれは市民相互で監視するということでもよい。要するに新しい都市づくりや、横浜の発展を、だれかがやってくれる、というのではなく、市民が市民自身の努力と抱負と負担においてなしとげることである。そしてこれは、市理事者とか、いわゆる文化人と称する連中の思いつきなどを、諾々ととりあげるのではなく、市民全体の希望の中から、最も能率的に、清潔で、健康で、高邁なものを具現化してゆくことである。

これらのことが、都市づくりの根本的な理念として、市民生活を集約してゆくところに新しい横浜

文化の創造が見い出されるであろう。

そしてもうひとつ、最後につけ加えておきたいのは、前にもふれたが、こうした新しい文化の進展には市民の一部に巣くうディレタント、いわゆる好事家たちからのお指図はうけないことである。これら節度のない自信家、程度の低い浪漫派たちは毒にはなってもあまり効果は期待できないからだ。

自信家であるだけに、彼らの趣旨にそぐわないときは、その中傷嫉妬に手こずらされる。

絵画、彫刻、詩文、建築そのいずれにしても文化的活動の面は広いが、この好事家たちはおしなべて詠嘆と退えいにつきやすい。このことは、一つの文化的運動が始動した場合、いつの間にか方向を間違えさせたり、停滞させてしまうことが多い。既成の文化人連盟とか協議会といったグループには、こうした傾向が多かれ、少なかれ散見できる。そしてこれは、その組織や対象が小さければ小さいほど、無意味なものが多く、大きければ大きいほど有害であった。

文化運動が、新しい都市の消長を決するものである以上、市民のあらゆる参画を望むとしても、この機会をやすやすとディレタントの好餌にさせてはならない。その事例はいままでもしばしば見えてきたことであり、いわゆる「横浜文化」と称されたものの中にも数多く生起してきたからである。横浜の都市づくりとそこに新しく創造されるべき市民生活——文化との結びつきは、これらの思い上った、偏頗な特殊グループを除き、素朴な一般市民の願望の中から掘り出されるべきである。